

DEBUT 首長

鹿児島県鹿屋市長 中西 茂氏

6次産業化へ戦略プラン 観光・医療は広域連携



なかにし・しげる 1953年鹿児島県鹿屋市生まれ。76年九州大経済卒、鹿児島県庁へ。土木部次長、農政部長などを歴任し、2013年、鹿屋市長選出馬のため県庁を退職。14年1月の市長選で初当選。2月から現職。大隅総合開発期成会会長も務める。

鹿児島県鹿屋市 九州南東の大隅半島中央部に位置する。人口約10万人と鹿児島市、霧島市に続く県内3番目の規模。2006年に旧鹿屋市と旧3町（輝北、串良、吾平）が合併して現在の鹿屋市が誕生した。豚や肉用牛、鶏など畜産業が盛ん。市内にある自衛隊鹿屋航空基地が有名。

——全国有数の食糧基地。農産物の製造から加工、販売まで一貫して手がける6次産業化をどう進める。

農業産出額は約453億円で市の2014年度当初予算額（417億円）を超える。うち畜産が339億円を占める。来春にも県が建設中の農産品加工施設が完成する。基盤整備によって農業に活路を見いだせるという思いは強い。

そのために農業戦略策定プランをつくる。特徴は農家、食品加工業、販売など第一線で働く人たちに計画づくりから参画してもらい、実行する先導役になってもらう点。農業は経営だ。いかに付加価値を高め、加工して売るか戦略を構築する。6月補正で予算を提案する。

——大隅半島は自治体の規模も小さい。

大隅半島は4市5町で人口は約24万人。鹿児島市は約60万人。大隅の市町が単独で何か施策を打ちたいと思っても予算に限界がある。そこで広域連携を考えている。交通ネットワーク、観光、医療、もちろん農業もだ。このままでは先細り。一枚岩になって取り組みたい。首長らが参加する大隅総合開発期成会という組織があり、各首長と話し合い広域化を進める。問題意識は同じで意思統一はできる。

——今年度、市長と市民との意見交換会に、参加者公募制を導入する。

「本気」で語ろう会」と名付けて6月から始める。市民はこれまで「意見を言う場がない」「言っても聞くだけ。一方通行だ」など市役所を遠い存在に感じていた。その結果が今回の市長選の52%という低投票率に表れた。

交換会は例えば妊婦や子育て中の母親グループ、商店街などこれまで行政とつながりの薄かった人に参加してもらいたい。

10人前後のグループが対象。幅広い分野からテーマを募集し、共通の問題点を探し出して政策に反映させる作業をする。今年度中に10回程度実施する予定だ。

——九州新幹線の全線開業に伴う観光客増加の恩恵は大隅半島に及んでいないという見方がある。

鹿児島市から鹿屋市に来るにはフェリーを使って大隅半島に渡る。時間がかかるが、問題は鹿屋市の観光客誘致に対するモチベーションの低さだ。

例えば、鹿屋航空基地の航空ショーには約5万人が訪れる。そこに地元の加工品などを買う場所がない。本当にもったいない。サツマイモ、深蒸し茶などはあるが、新製品開発や売り込みはこれからだ。その視点からも6次産業化推進で地域を変えていきたい。

（聞き手は

鹿児島支局長 近藤 英次）